

アトリエ 琉游舎 だより 153号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年5月24日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

琉游舎 六歳の誕生日

- 5月20日で琉游舎がオープン六周年となります。周年なので恒例により数字にまつわる話を。
- 「6」は縁起のよい数字なのか縁起の悪い数字なのか、どちらでしょう。キリスト教世界では聖書の中では「7」が聖なる数字とされるのに対して、それに1つ足りない「6」は不完全な数字とされているようです。また「666」は獣の数字または悪魔の数字と呼ばれているようで、キリスト教世界では「6」はあまり縁起のよい数字ではなさそうです。
- 仏教世界では「6」にまつわる言葉がたくさんあります。「六道」「六根」「六識」「六境」「六大」「六神通」「六波羅蜜」など、どちらかといえばあるカテゴリーを六種にまとめたものが多そうです。「六道」は衆生がその業に従って輪廻を繰り返す迷いの世界です。地獄餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道間を永遠に繰り返すというインド思想です。これが六道輪廻です。仏教の教えは悟りによってこの六道輪廻から抜け出すこと（解脱）にあります。
- 「六根」は人に執着や怒りなどの「苦」をもたらす6つの感覚器官を表します。「眼、耳、鼻、舌、身、意」です。「六境」は感覚器官の対象となる「色、声、香、味、触、法」「六識」は感覚器官と対象によって得られた認識です。この六根から生じる欲望執着を断ち切って心身ともに清浄になることを六根清浄といいます。靈山に登る際によく唱えられる言葉です。
- 「六波羅蜜」この欄では彼岸会法要の説明の時に何度か説明をしている安らぎの処（彼岸）に至るための六の実践徳目です。布施(完全な恵み) 持戒(自己反省) 忍辱(忍耐) 精進(努力の実践) 禅定(心の統一) 智慧(真実の智慧、永遠のいのちの把握)。仏教の言葉というとなんか難しいことを要求されているように思われますが、六波羅蜜は毎日を悔いなくちゃんと生きるための実践方法です。琉游舎は7年目のこれからもちゃんと活動することを実践徳目としていきたいと思えます。7年目も宜しく願いいたします。

5・6月スケジュール

5月			25	26	27	28
月	火	水	映画会 お休み			
29	30	31	6月1日 映画会 お休み	2	3	4
5	6	7	8 映画会 お休み	9	10	11
12	13 読書会 13時半から	14	15 映画会 13時半から	16	17	18
19	20	21	22 映画会 13時半から	23	24	25
26	27 読書会 13時半から	28	29 映画会 お休み	30	7月1日	2

読書会

6月13日
6月27日
(火) 13時半

6月の写経会

お休みします
7月は第2日曜
7月9日に開催

映画会

変則日程です
が開催します

狂言綺語…平等と非平等

5月の爽やかな日々は長く続かず、周期的に雨の日がやってきます。翌日は決まって日差しの強い日となり、一気に草が生長します。そして爽やかな空気が次第に湿気を帯びた重苦しい空気に変わり始めると梅雨入り間近です。五月の空気の乾いた新緑の季節も終わり、緑が日に日に濃くなってきます。5月中に猛暑日を記録したとはいえ梅雨寒の日が必ず来るため、夏支度に全部取り替えることもできません。平均温度や雨量に変動はあっても、必ず梅雨はやってきて、その後に夏の熱い日差しが注いでくることは間違いないのですが。

太陽は森羅万象全てに光を与えます。太陽自体が発する光に関すれば、対象を選ばずその光はあまねく分け隔てなく注ぎます。しかしその光はうける側はその環境、性格、能力等のあらゆる条件によって、その光を等しく平等に受け取ることはできません。光を必要とする時は、知恵を絞り太陽の恵みを獲得するために光を求めて行動を起こすでしょう。逆に太陽の光が過多で脅威がもたらされるとき、それを避けるために日陰を作り光を遮断し、自然をコントロールする方法を獲得するでしょう。そして今ではクーラーの効いた部屋で太陽の光の恩恵と暴力を自在に操ることも可能になったように思われます。その反動が地球温暖化と異常気象です。どこかが恵みを受ければ、どこかにその付けが回ってきます。誰かがその恩恵を過度に受け取り、その災厄を誰かに押しつけた結果が、格差です。先進国と言われる国々はその付けをあからさまに途上国に押しつけることは、困難とみて、押しつけておいた災厄を私たちも引き受けるから、あなたたちも引き受けてねと、グローバスサウスといわれる国々を始め、途上国にその災厄を割り振ろうとしているように見えますが、恩恵を受ける前に災厄だけを押しつけられても、ハイ分かりましたと言えないG7以外の国々の立場を私たちは理解しているでしょうか。太陽は光を平等に注ぎます。しかし光をうける側が不平等を作っていることに思いを致すとき、果たして「平等」という思想が人類普遍の思想であると言い張ることは可能なのでしょうか。

雨もまた太陽と同じように平等に降り注ぎ、しかし雨を受ける側にはそれぞれの差異や種別があります。法華経の中にある私の好きな経文、薬草喩品第5です。そこで説かれる譬喩が「三草二木の喩」です。「譬如三千大千世界 山川溪谷土地 所生卉木叢林 及諸薬草 種類若干 名色各異 密雲弥布。徧覆三千大千世界 一時等澍 其沢普洽 卉木叢林 及諸薬草 小根小茎 小枝小葉 中根中茎 中枝中葉 大根大茎 大枝大葉 諸樹大小 随上中下 各有所受 一雲所雨 称其種性 而得生長 華果敷実 雖一地所生 一雨所潤 而諸草木 各有差別 (例えば世界の山や川や溪谷や土地に生える草や木や叢、林、諸々の薬草は、様々な種類があり名前も形も異なっている。厚い雲が広がり、普く世界を覆い一時に等しく降り注ぐその雨は、普く草や木や叢や林や諸々の薬草の小さい根、小さい茎、小さい枝、小さい葉や、中ほどの根や茎、枝や葉、大きい根、茎、枝、葉を潤す。諸々の樹の大小、上中下に随って各々受ける場所がある。一つの雲から降った雨は、その種となる素質に応じて生長することができて、花をつけ、実をみのらせる。一つの大地から生じ、一つの雨に潤されるのであっても、諸々の草木は、各々差異や種別がある。)」大地に生える草木は、それぞれの種類や大小によって異なるが、大雲が起こり雨が降り注がれると、すべての草木は平等に潤います。お釈迦さまの教えが雨に喩えられているのです。雨はただひとつ、つまり教えはただひとつです、しかしそれを受け取る植物たちは種々あるように、教えを受け取る衆生も受け取り方は様々です。同じ雨を受けても種々の植物たちは様々な花を咲かせ、実をみのらせます。同じ大地に生えひとつの雨に潤されても草木はそれぞれの性質によって異なった成長と実りを見せるのです。この降り注がれる雨の教えはひとつです。つまり「全ての衆生は等しく仏になることができる」という仏の慈悲です。その教えの雨(慈悲)を等しく受け取った衆生は、それぞれの環境、能力、性格に応じてその平等の慈悲を受け取り、各々の機根、つまり小根小茎 小枝小葉 中根中茎 中枝中葉 大根大茎 大枝大葉 諸樹大小 随上中下、それぞれに応じて、各有所受、それぞれが平等の慈悲を受け取り、その教えを信じて日々を生きていくのです。これが仏教徒です。

平安時代末期に後白河方法が編纂した今様歌謡集「梁塵秘抄」に「釈迦の御法は唯一つ、一味の雨にぞ似たりける、三草二木は品々に、花咲き実なるぞあはれなる」があります。「三草二木の喩」を詠ったものです。仏教を受持した日本人の精神理念が「あはれ」という情緒観と融合した歌です。以後鎌倉期から今に至るまで日本人の精神基調を支える感性がここにあるように思えます。仏の慈悲は平等に衆生に与えられます(機会平等)。しかしその結果は一律ではなく各々の機根に応じた花実です(結果非平等)。その花実を日本人は詠嘆と喜怒哀楽を込めて「あはれ」と称してきました。それは賞嘆であり、慈しみであり、共感であり、様々な感情が評価を交えずに吐露された言葉です。他者の差異をありのままに共感して受け入れる言葉が「あはれ」です。そこには善悪や好悪、肯定も否定もありません。今そこにある非平等を互いがありのままに受け入れて、お釈迦さまの慈悲を共に感謝する気持ちがあるだけです。この精神が日本人のいのちとして今に継承されているのであれば、あらゆる差異を「不平等」や「差別」と定義し普遍的価値や正義の旗印の下に解消して行こうとするイデオロギーは「あはれ」を生きる私たちには不似合いなのかもしれません。

太陽の光も雨も仏の慈悲も私たちはただありのままに受け入れるだけです。その花実の非平等をもありのままとして受け入れることには、結果的に差別や不平等を容認し人間の自助努力を放棄しているという批判があるかもしれません。難しい問題ですが、私は非平等を自己と他者の視点ではなく、光や雨や慈悲の視点、つまり「おおいなるもの」の視点に返すことでその批判に答えることができるのではと考えています。